

## 2 論文・学会等への発表



(1) 論文等発表一覧

論 文 名	執 筆 者	掲 載 誌	抄録掲載頁
油症患者血液中2, 3, 4, 7, 8-PeCDF 濃度の4年間の傾向	高尾佳子、小野塚大介、片岡恭一郎、戸高 尊*、平川博仙、梶原淳睦、吉村健清 * 九州大学大学院医学研究院皮膚科学分野	福岡医学雑誌、98(5) 149-152、2007.	P 124
Geographic prediction of tuberculosis clusters in Fukuoka, Japan	Daisuke Onozuka, Akihito Hagihara* * Kyushu University	BMC Infect Dis, 7(26), 2007.	P 124
多環芳香族炭化水素類の底質中における分解性	塚谷裕子、梶原佑介、馬場義輝	日本水処理生物学会誌、第43号、199-207、2007	P 124
Determination of Hexaconazole in Surface Water Samples from River and the Sea by Liquid Chromatography-Electrospray Tandem Mass Spectrometry	Hiroko Tsukatani, Kazuhiro Tobiishi, Yoshito Tanaka, Kenji Sakuragi, Tasoh Ikeura, Matayoshi Nakamura	Biosci. Biotechnol. biochem., 72, 145-154, 2008.	P 124
すぐに役立つ腸管出血性大腸菌の検査法 —材料の取り方から分離株の遺伝子型別まで—	小林一寛、堀川和美 編集	文教出版	P 125
過去3シーズンに検出されたノロウイルスの遺伝子型について	江藤良樹、世良暢之、石橋哲也、千々和勝己	福岡県保健環境研究所年報、第34号、61-66、2007.	P 125
ポジティブリスト制に対応したGC/MS及びLC/MS/MSによる残留農薬一斉分析法の検討	村田さつき、芦塚由紀、梶原淳睦、平川博仙、堀 就英、中川礼子	福岡県保健環境研究所年報、第34号、67-72、2007.	P 125
Concentrations of polychlorinated dibenzo-p-dioxins, polychlorinated dibenzofuran, and non-ortho and mono-ortho polychlorinated biphenyls in blood of Yusho patients	Takashi Todaka* <sup>1</sup> , Hironori Hirakawa, Tsuguhide Hori, Kazuhiro Tobiishi, Takao Iida, Masutaka Furue* <sup>1</sup> * <sup>1</sup> Kyushu University	Chemosphere, 66, 1983-1989, 2007.	P 125
Concentration and distribution of dioxins and related compounds in human tissues	Takao Iida, Takashi Todaka* <sup>1</sup> , Hironori Hirakawa, Tsuguhide Hori, Kazuhiro Tobiishi, Takahiko Matsuda, Shaw Watanabe* <sup>2</sup> , Taketo Yamada* <sup>3</sup> * <sup>1</sup> Kyushu University * <sup>2</sup> Tokyo University of Agriculture * <sup>3</sup> Keio University	Chemosphere, 67, S263-S271, 2007.	P 126

論文名	執筆者	掲載誌	抄録掲載頁
Concentration of polychlorinated dibenzo-p-dioxins, polychlorinated dibenzofurans, and dioxin-like polychlorinated biphenyls in blood collected from 195 pregnant women in Sapporo City, Japan	Takashi Todaka* <sup>1</sup> , Hironori Hirakawa, Jumboku Kajiwara, Tsuguhide Hori, Kazuhiro Tobiishi, Daisuke Onozuka, Shizue Kato* <sup>2</sup> , Seiko Sasaki* <sup>2</sup> , Sonomi Nakajima* <sup>2</sup> , Yasuaki Saijo* <sup>2</sup> , Fumihiko Sata* <sup>2</sup> , Reiko Kishi* <sup>2</sup> , Takao Iida, Masutaka Furue* <sup>1</sup> *1 Kyushu University *2 Hokkaido University	Chemosphere 69, 1228-1237, 2007.	P 126
油症発生より38年間の患者血液中PCDFsの濃度変遷	増田義人* <sup>1</sup> 、吉村健清、梶原淳睦、John Jake Ryan* <sup>2</sup> *1 第一薬科大学 *2 Health and Welfare Canada	福岡医誌98(5)、182-195、2007.	P 126
Dioxin Concentration in Blood of Patients Collected during Medical Check-up for Yusho in 2004-2005	Takashi Todaka*, Hironori Hirakawa, Jumboku Kajiwara, Tsuguhide Hori, Kazuhiro Tobiishi, Daisuke Onozuka, Takao Iida, Takesumi Yoshimura, Masutaka Furue* <sup>1</sup> * Kyushu University	Fukuoka Acta Med. 98(5)、222-231, 2007.	P 126
福岡県油症検診(2006年度)受診者における血液PCB濃度と性状	堀 就英、安武大輔、戸高 尊* <sup>1</sup> 、平川博仙、井上 英* <sup>2</sup> 、梶原淳睦、中川礼子、芦塚由紀、飯田隆雄* <sup>3</sup> 、吉村健清 *1 九州大学大学院 *2 (社)日本食品衛生協会 *3 (財)北九州生活科学センター	福岡医学雑誌、98(5)、176-181、2007.	P 127
ABP、血圧変動と頸動脈病変	新谷依子、菊谷昌浩* <sup>1</sup> 、今井 潤* <sup>1</sup> *1 東北大学大学院	血圧、Vol.15 no.1、4-5、2008.	P 127
2005年度油症検診における血液中ポリ塩化クアテルフェニルの分析	芦塚由紀、中川礼子、平川博仙、堀 就英、梶原淳睦、飯田隆雄*、吉村健清 * (財)北九州生活科学センター	福岡医学雑誌、98(5)、106-109、2007.	P 127
Determination of brominated flame retardants and brominated dioxins in fish collected from three regions of Japan	Yuki Ashizuka, Reiko Nakagawa, Tsuguhide Hori, Daisuke Yasutake, Kazuhiro Tobiishi, Kumiko Sasaki* * National Institute of Health Sciences	Molecular Nutrition Food Research, 52, 273-283, 2008.	P 127
飲用水中におけるラドンの除去手法並びに定量的解析	檜崎幸範、安岡由美* <sup>1</sup> 、志野木正樹* <sup>1</sup> 、石川徹夫* <sup>2</sup> 、床次眞司* <sup>2</sup> *1 神戸薬科大学 *2 放射線医学総合研究所	RADIOISOTOPES,55, 679-686,2006.	P 128

論文名	執筆者	掲載誌	抄録掲載頁
茶畑土壌中のマンガンの形態	石橋融子、松尾宏、馬場義輝、 今任稔彦 <sup>*1</sup> 、平田健正 <sup>*2</sup> <sup>*1</sup> 九州大学 <sup>*2</sup> 和歌山大学	福岡県保健環境研究所年報 第34号、73-79、2007.	P 128
矢部川水系における感潮域の水質評価 について	田中義人、熊谷博史、松尾宏、 中村又善	福岡県保健環境研究所年報 第34号、80-86、2007.	P 128
不適正埋立された廃棄物に由来する有 害化学物質の周辺環境中における長期 的変遷	土田大輔、高橋浩司 <sup>*1</sup> 、濱村研吾、 鳥羽峰樹 <sup>*2</sup> 、黒川陽一 <sup>*2</sup> 、永瀬誠、 宇都宮彬 <sup>*3</sup> <sup>*1</sup> 環境部環境政策課 <sup>*2</sup> リサイクル総合研究センター <sup>*3</sup> 日本環境衛生センター	廃棄物学会論文誌、Vol. 18、 No. 6、pp. 434-442、2007.	P 128
安定型最終処分場の分類による削減さ れた最終処分費用と潜在的な環境修復 費用の推定	土田大輔、中山裕文 <sup>*1</sup> 、島岡隆行 <sup>*1</sup> <sup>*1</sup> 九州大学大学院	廃棄物学会論文誌、Vol. 19、 No. 2、pp. 120-130、2008.	P 129
安定型産業廃棄物最終処分場の監視の ための熱赤外リモートセンシング技術 の適用	中山裕文 <sup>*1</sup> 、島岡隆行 <sup>*1</sup> 、小宮哲平 <sup>*1</sup> 、 土田大輔、高橋浩司 <sup>*2</sup> 、宇都宮彬 <sup>*3</sup> <sup>*1</sup> 九州大学大学院 <sup>*2</sup> 環境部環境政策課 <sup>*3</sup> 日本環境衛生センター	生活と環境、Vol. 53、No. 3、pp. 44-50、2008.	P 129
Two new species of the genus <i>Laccobius</i> (Coleoptera, Hydrophilidae) from Japan	Yuuki Kamite <sup>*1</sup> , Takeshi Ogata, Naoyuki Hikida <sup>*2</sup> <sup>*1</sup> 名古屋市衛生研究所 <sup>*2</sup> 水戸市千波町	Elytra, 35(1), 34-41,2007.	P 129
New record of <i>Crenitis neglecta</i> (Coleoptera, Hydrophilidae) from Kyushu, Japan	Yūsuke Minoshima <sup>*1</sup> , Takeshi Ogata, Hiroyuki Yoshitomi <sup>*2</sup> <sup>*1</sup> 東京農業大学 <sup>*2</sup> 株式会社環境指標生物	Elytra, 35(2), 557-558, 2007.	P 129
計（論文等発表一覧）	24件		

## (2) 発表論文抄録

### 1 油症患者血液中2,3,4,7,8-PeCDF濃度の4年間の傾向

高尾佳子、小野塚大介、片岡恭一郎、戸高尊\*、平川博仙、梶原淳睦、吉村健清：福岡医学雑誌、98(5)、149-152、2007.

油症検診において2001年度からダイオキシン類の測定が行われている。ダイオキシン類の測定結果については、測定希望者全体に対して傾向が報告されてきた。しかし、同じ集団を対象とした経年的な報告はなされていない。そこで、同じ集団を対象とし、ダイオキシン類の中でも油症診断基準となっている2,3,4,7,8-PeCDFの4年間の傾向について解析した。油症発生から約39年が経過し、血液中2,3,4,7,8-PeCDF濃度に大きな変化は見られなくなっているものの、全体的には経年的に減少傾向が見られ、男女別で傾向を見た場合も同じであった。血液中濃度でグループ分けをし傾向をみた場合は、血液中濃度の低いグループにおいては、ほとんど変化はなく、高いグループにおいては減少傾向がみられた。

\* 九州大学大学院医学研究院皮膚科学分野

### 2 Geographic prediction of tuberculosis clusters in Fukuoka, Japan

Daisuke Onozuka, Akihito Hagihara\* : BMC Infect Dis, 7(26), 2007.

近年、結核は再興感染症として世界的に流行がみられている。地域における結核の流行状況を探知し評価することは、結核の効果的な予防につながると考えられるが、空間及び時間の変遷を考慮した流行探知の検討は今までにほとんど行われていない。そこで、福岡県における1999年から2004年までの新登録結核患者9,119人について、結核の流行状況を評価するために解析を行った。その結果、結核の流行は、筑豊の旧産炭地区、北九州都市圏、福岡都市圏において探知されたものの、いずれも小規模な流行にとどまっており、大規模な流行は2000年以降発生していないことが明らかとなった。

\* Kyushu University

### 3 多環芳香族炭化水素類の底質中における分解性

塚谷裕子、梶原佑介、馬場義輝：日本水処理生物学会誌、第43巻第4号、199-207、2007.

多環芳香族炭化水素類(PAHs)汚染底質の処理を目的として、福岡県で採取した底質におけるPAHsの分解能の検討を行った。県内18地点の底質のうち、PAHs含有濃度により3地点を選び(No.1 低濃度、No.2 中程度濃度、No.3 高濃度;18地点中)、この3底質に15種類のPAHsを添加し、20度暗室で4週間培養実験を行った。No.1の底質で最もPAHs含有量の減少が確認された。No.3の底質は2002~2003年に行われた調査の際13PAHsの汚染が確認され特にナフタレン(19,000  $\mu\text{g/g-dry soil}$ )を高濃度含有する汚染地域の河川下流で採取したものであるが、No.3の底質よりもNo.1の底質でより高いPAHsの減少傾向が認められた。また、培養実験開始時と実験後での酸化還元電位を調べたところ、No.1が最も還元状態になりやすく、底質におけるPAHsの酸化的分解に最も適しているものと推察された。No.1の底質における上記9PAHsの半減期は、3~36日であった。

### 4 Determination of Hexaconazole in Surface Water Samples from River and the Sea by Liquid Chromatography-Electrospray Tandem Mass Spectrometry

Hiroko Tsukatani, Kazuhiro Tobiishi, Yoashito Tanaka, Kenji Sakuragi, Tasoh Ikeura, and Matayoshi Nakamura: Biosci. Biotechnol. Biochem., 72(1), 149-154, 2008.

LC-MS/MS法による、河川水及び海水試料中に存在するヘキサコナゾールの選択的かつ簡便な分析法の開発を行った。イオン化法はESI+法であり、SRM法を用いた。水試料を固相に通水した後メタノールで溶出し、超純水を添加して、分析試料とした。本法によるヘキサコナゾールの検出限界は0.006  $\mu\text{g/L}$ であった。海水試料中からはヘキサコナゾールは検出されなかった。河川水試料中からはピークの痕跡がみられたものの、検出限界値未満であった。また、ヘキサコナゾールの河川水中における生分解性を調べたところ、20℃、暗室条件下で、3週間振とう培養を行ったが、顕著な分解はみられなかった。このことから、河川水中にヘキサコナゾールが流入した場合、長期間存在する可能性が示唆された。

## 5 すぐに役立つ腸管出血性大腸菌の検査法 —材料の取り方から分離株の遺伝子型別まで—

小林一寛、堀川和美 編集：文教出版、2007

1996年の腸管出血性大腸菌 O157の大規模発生を受けて、全国地方衛生研究所技術協議会が実施していた厚生科学研究費補助金による「地方衛生研究所の機能強化に関する研究」の分担指定研究として腸管出血性大腸菌の検査法に係る研究が実施された。当時福岡県保健環境研究所長であった森 良一所長が分担研究者となり、「腸管出血性大腸菌の試験法と地域モニタリングの確立」について研究を行った。全国地方衛生研究所6ブロックから秋田県、千葉県、愛知県、大阪府、愛媛県および福岡県の代表者が研究協力者として組織し、1996年から2年間研究を実施した。本研究で得られた成果は、腸管出血性大腸菌検査に生かされた。本書は、厚生労働科学研究終了後もそれぞれの府県で腸管出血性大腸菌を対象に、検査及び研究を継続してきた研究協力者が、腸管出血性大腸菌の検査法について、分担して執筆した。本書は第一線の検査現場ですぐに役立つことを目的に、検査材料の採取方法、培養検査、遺伝子検査及び遺伝子型別法などについて、図や表を用いて解説した。

## 6 過去3シーズンに検出されたノロウイルスの遺伝子型について

江藤良樹、世良暢之、石橋哲也、千々和勝己：福岡県保健環境研究所年報第34号、61-66、2007.

福岡県内でのノロウイルスの各遺伝子型の流行状況を把握するために、我々は2004年10月から2007年3月までに検出されたノロウイルスの遺伝型を決定した。491件の検体は感染症発生動向調査、食中毒（疑いを含む）事例、高齢者福祉施設での感染症事例から採取した。その結果、genogroup Iでは4種類の合計17件、genogroup IIでは7種類の合計145件の遺伝子型が決定された。genogroup II genotype 4 (GII/4)は遺伝子型別が可能であったノロウイルスの162件中124件(76.5%)を占め、ノロウイルスによる集団発生事例では30事例中21事例(70.0%)から検出された。また、GII/4は2004/2005年シーズンと2006/2007年シーズンの主な遺伝子型であり、同時期に散发事例と集団発生事例から検出された塩基配列は非常に近縁であった。これらのことから、感染症として地域流行していた GII/4と集団発生事例の関連性が示唆された。

## 7 ポジティブリスト制に対応したGC/MS及びLC/MS/MSによる残留農薬一斉分析法の検討

村田さつき、芦塚由紀、梶原淳睦、平川博仙、堀 就英、中川礼子：福岡県保健環境研究所年報、第34号、67-72、2007.

2006年5月29日より食品中の残留農薬、動物用医薬品、飼料添加物のポジティブリスト制が施行された。そこで、残留農薬の検査体制の充実を目的とし、検査農薬数及び検体数の拡大に対応するため、抽出法の検討、さらに GC/MS 及び LC/MS/MS を用いた一斉分析法の検討を行った。新たに検討した127農薬のうち、回収率が70-120%であったものは、野菜においては114農薬あり、その他120%以上では8農薬、50-70%では3農薬であり、玄米でも同様の結果が得られた。また、県内の市場で出回っている野菜、果実、玄米の100件について、各々200農薬の残留調査を行ったところ、39件の野菜、1件の果実、4件の玄米より農薬が検出され、そのうち5件の野菜については基準値を上回る値の農薬が検出された。

## 8 Concentrations of polychlorinated dibenzo-p-dioxins, polychlorinated dibenzofuran, and non-ortho and mono-ortho polychlorinated biphenyls in blood of Yusho patients

Takashi Todaka\*, Hironori Hirakawa, Tsuguhide Hori, Kazuhiro Tobiishi, Takao Iida, Masutaka Furue\*: *Chemosphere*, 66, 1983-1989, 2007.

油症認定患者(2004年、243名)及び健常者127名の血液中PCDDs, PCDFs, Dioxin like PCBs濃度を測定した。その結果、油症患者の血液中T-TEQ濃度は125.7pg-TEQ/g lipidであり、健常者は36.9 pg-TEQ/g lipidで油症患者の方が健常者に比べ有意に高い値を示した。特に、血中の2, 3, 4, 7, 8-PeCDF濃度は油症患者の方が健常人より10倍以上高く、油症事件発生後34年が経過した現在も高濃度に存在した。

\* Kyushu University

## 9 Concentration and distribution of dioxins and related compounds in human tissues

Takao Iida, Takashi Todaka\*<sup>1</sup>, Hironori Hirakawa, Tsuguhide Hori, Kazuhiro Tobiishi, Takahiko Matsuda, Shaw Watanabe\*<sup>2</sup>, Taketo Yamada\*<sup>3</sup>: *Chemosphere*, 67, S263-S271, 2007.

多数の被検者を対象として種々の人体臓器のダイオキシン類(DXNs)濃度を調べた例は極めて少ない。本研究では被検者(20名)を対象とし、8種の臓器、組織、分泌液(血液、肺、肝臓、胆汁、胆汁、膵臓、腎臓、腸間脂肪)中のDXNsの蓄積状況を明らかにした。その濃度範囲は平均値で50~230pg-TEQ/g lipidであり、肝臓が最も高い濃度を示した。一方、DXNsの排泄に関与している胆汁は50pg-TEQ/g lipidと比較的低濃度であった。全TEQに対する寄与率はPCDDs>PCDFs>Non-ortho-PCBs>Mono-ortho-PCBsの順であった。臓器間には各異性体濃度の相関性が観察された。

\*1 Kyushu University

\*2 Tokyo University of Agriculture

\*3 Keio University

## 10 Concentration of polychlorinated dibenzo-p-dioxins, polychlorinated dibenzofurans, and dioxin-like polychlorinated biphenyls in blood collected from 195 pregnant women in Sapporo City, Japan

Takashi Todaka\*<sup>1</sup>, Hironori Hirakawa, Jumboku Kajiwara, Tsuguhide Hori, Kazuhiro Tobiishi, Daisuke Onozuka, Shizue Kato\*<sup>2</sup>, Seiko Sasaki\*<sup>2</sup>, Sonomi Nakajima\*<sup>2</sup>, Yasuaki Saijo\*<sup>2</sup>, Fumihiko Sata\*<sup>2</sup>, Reiko Kishi\*<sup>2</sup>, Takao Iida, Masutaka Furue\*<sup>1</sup>: *Chemosphere* 69, 1228-1237, 2007.

2002-2004年に北海道で採取された妊婦195人(初産婦101名、平均年齢28.8歳、経産婦94名、平均年齢32.4歳)の血液中ダイオキシン類(PCDD、PCDF、Dioxin like PCB)濃度を測定した。血液中T-TEQ濃度は初産婦17.4 pg-TEQ/g lipid、経産婦14.0 pg-TEQ/g lipidで経産婦の方が低く、妊婦の血液中ダイオキシン類濃度は出産で低下し、加齢により増加することが明らかになった。

\*1 Kyushu University

\*2 Hokkaido University

## 11 油症発生より38年間の患者血液中PCDFsの濃度変遷

増田義人\*<sup>1</sup>、吉村健清、梶原淳睦、John Jake Ryan\*<sup>2</sup>: *福岡医誌*98(5)、182-195、2007.

福岡県の油症一斉検診を受診した油症認定患者の血液中PCB#118、PCB#153、PCB#156、PCBs濃度を1974年から2006年の38年間にわたって調査した。PCB#153、PCB#156および総PCBsの濃度はいずれもAパターンが最も高く、Bパターン、Cパターンでは順次低くなり、その順番を保ちながら38年にわたってそれぞれの濃度は減少した。それに対し、PCB#118の濃度はAパターンで最も低く、Bパターン、Cパターンでは順次高くなり、その順番を保ちながら38年にわたって減少した。

\*1 第一薬科大学

\*2 Health and Welfare Canada

## 12 Dioxin Concentration in Blood of Patients Collected during Medical Check-up for Yusho in 2004-2005

Takashi Todaka\*, Hironori Hirakawa, Jumboku Kajiwara, Tsuguhide Hori, Kazuhiro Tobiishi, Daisuke Onozuka, Takao Iida, Takesumi Yoshimura, Masutaka Furue\*: *Fukuoka Acta Med.* 98(5), 222-231, 2007.

平成16、17年度の油症健診受診者の内、血液検査を希望した316名と351名について血中PCDDs、PCDFsおよびnon-ortho PCBs濃度を測定し、これら化合物の濃度を油症認定患者、未認定者及び一般健常人とで比較した。その結果、2,3,4,7,8-PeCDF濃度が油症患者は一般健常人に比べ、約10倍高く、未認定者はほぼ同等であった。しかし、未認定者の中にも一般健常人と比べ異常に高い2,3,4,7,8-PeCDF濃度を示す者が認められた。これまでに行った追跡調査の結果を基に2,3,4,7,8-PeCDF濃度を追補した新しい診断基準が平成16年9月29日に策定され、平成16年度に受診した74名の未認定者のうち7名が、平成17年度も受診した114名の未認定者のうち14名が新たに油症患者と認定された。

\* Kyushu University

### 13 福岡県油症検診（2006年度）受診者における血液PCB濃度と性状

堀 就英、安武大輔、戸高 尊<sup>1</sup>、平川博仙、井上 英<sup>2</sup>、梶原淳睦、中川礼子、芦塚由紀、飯田隆雄<sup>3</sup>、吉村健清：福岡医学雑誌、98(5)、176-181、2007.

2006年度に福岡県で実施した油症検診受診者のうち58名の血液PCB分析を実施した。高分解能ガスクロマトグラフィー／高分解能質量分析法（HRGC／HRMS）を用い、血液中のPCB異性体68種類を精密に定量した。58名における総PCB濃度の最高値は6.63 ppbであり、これは対照血液に対して8.1倍高い値であった。2004年度と2006年度のパターン判定結果を27名について比較したところ、判定結果にほとんど変化は認められなかった。認定患者10名と一般住民127名について血中PCB各異性体の平均濃度を比較した。認定患者で顕著に高い濃度で検出された異性体はPCB157、156、189、137、195、170、99であった。一方、顕著に低い濃度を示した異性体は、PCB118、105であった。

\*1 九州大学大学院

\*2 (社)日本食品衛生協会

\*3 (財)北九州生活科学センター

### 14 ABP、血圧変動と頸動脈病変

新谷依子、菊谷昌浩\*、今井 潤\*：血圧、Vol.15 no.1、4-5、2008

自由行動下血圧（ABP）は随時血圧（CBP）よりも予測能が高く、血圧変動もまた臓器障害や予後と関連することが報告されている。そこで、日本の一般住民を対象として、ABPおよび血圧変動と頸動脈病変との関連を明らかにすることを目的として研究を行った。その結果、ABPはCBPよりも密接に頸動脈病変と関連することが明らかとなった。さらに、血圧レベルだけでなく血圧変動もまた頸動脈病変との関連が認められ、特に夜間血圧の重要性が示唆された。

\* 東北大学大学院

### 15 2005年度油症検診における血液中ポリ塩化クアテルフェニルの分析

芦塚由紀、中川礼子、平川博仙、堀 就英、梶原淳睦、飯田隆雄\*、吉村健清：福岡医学雑誌、98(5)、106-109、2007.

ポリ塩化クアテルフェニル（PCQ）はPCBを熱媒体として加熱使用中に生成し、油症患者が摂取したライスオイル中に混入したと考えられている物質である。そのため、血液中PCQ濃度は1981年に油症の診断基準に追加され、現在も油症に特徴的かつ有用な基準の一つとなっている。2005年度油症一斉検診における81名の血液中PCQ濃度を分析した結果、28名の血液からPCQが検出された。典型的な油症患者のPCB濃度パターンであるAパターンと油症患者と健常者の中間であるBパターンのほとんどは、現在もPCQが0.1ppb以上の高い濃度を示していた。1979年のデータと比較すると、油症患者のPCQ濃度は3分の2から3分の1程度に減少していたが、30年以上経過した現在もまだ体内に高濃度に残留しており、血液中PCQ濃度は、PCB、PCDF濃度とともに油症診断基準として重要な所見であると考えられた。

\* (財)北九州生活科学センター

### 16 Determination of brominated flame retardants and brominated dioxins in fish collected from three regions of Japan

Yuki Ashizuka, Reiko Nakagawa, Tsuguhide Hori, Daisuke Yasutake, Kazuhiro Tobiishi, Kumiko Sasaki\* : Molecular Nutrition Food Research, 52, 273-283, 2008.

国内3地域から集めた計45件（各15件）の魚介類試料について、臭素化ダイオキシン類、臭素化ジフェニルエーテル（PBDEs）及びテトラブロモビスフェノールA（TBBPA）の汚染度調査を実施した。臭素化ダイオキシンでは7臭素化ジベンゾフランが7試料から検出され、その濃度は0.10-25.6pg/g wet weight（ww）であった。PBDEsはすべての試料から検出され、総PBDEs濃度で0.01-2.88ng/g wwの範囲であった。TBBPAは29試料から0.01-0.11ng/g wwの濃度で検出され、平均値は総PBDEs濃度と比較すると約1/10であった。総PBDEs濃度は魚介類の脂肪含量との相関が見られたが、TBBPA濃度と脂肪含量の相関は見られなかった。日本人の魚介類の一日消費量を82gと仮定し、魚介類からの一日摂取量を算出した結果、PBDEsの摂取量はLOAEL（最小毒性発現量）の1mg/kg/dayを大きく下回り、臭素化ダイオキシン類は塩素化ダイオキシン類の一日摂取量と比較すると非常に低い値であると推定された。

\* National Institute of Health Sciences

## 17 飲用水中におけるラドンの除去手法並びに定量的解析

檜崎幸範、安岡由美<sup>\*1</sup>、志野木正樹<sup>\*1</sup>、石川徹夫<sup>\*2</sup>、床次眞司<sup>\*2</sup>：RADIOISOTOPES, 55, 679-686, 2006.

飲用水中のラドンは、人に対して健康被害をもたらすことがある。地下水起源の飲用水中にはそのラドンが高濃度で含まれることもある。この水中に存在するラドンの濃度を低減させる目的で、浄水器、加熱、曝気及びくみ置きについて、飲用水中からのラドンの除去効果を検討した。(1)家庭用浄水器：ろ過材に粒状活性炭を用いた浄水器では、短期間の除去効果は認められたが、処理水量が増えるほどラドンの除去率は低下した。(2)加熱：水中のラドン濃度は、水温とともに減少し、沸騰が開始するとラドンはほとんど除去された。(3)曝気：空気を水中に分散させることによって、効率の良いラドンの除去効果が得られた。ラドンの除去率は、通気量とともに指数関数的に増加した。(4)くみ置き：蓋をしない容器中のラドン濃度は徐々に低下した。ラドンの除去率は水と空気との接触面積の大きさ、容器の形状や深さに関係した。沸騰や曝気のように激しく界面が乱れ、水中からの泡立ちがラドンの除去には効果的であった。

\*1 神戸薬科大学

\*2 放射線医学総合研究所

## 18 茶畑土壌中のマンガンの形態

石橋融子、松尾宏、馬場義輝、今任稔彦<sup>\*1</sup>、平田健正<sup>\*2</sup>：福岡県保健環境研究所年報、第34号、73-79、2007.

茶畑を集水域とする湧水の流れ込む小河川で、指針値 0.2mg/l を超えるマンガンを検出された。マンガンは、茶畑土壌由来であると考えられた。そこで、茶畑の深さ 0-数 cm における土壌 (A<sub>0</sub>層) を採取し、全、水溶性、置換性及び易還元性マンガンを含有量を測定し、湧水のマンガンを濃度を上昇させる原因について検討した結果、土壌のpHの低下により水溶性及び置換性マンガンを含有量の割合が増加したことが要因の一つであると考えられた。また、同茶畑の茶葉の腐植物から構成される土壌表層 (0層) の全マンガンを含有量は 1700µg/g-dry であり、A<sub>0</sub>層等と比較して高い値を示した。茶葉等の分析結果から、茶畑土壌表面への主なマンガンの供給源は茶葉であると考えられた。

\*1 九州大学

\*2 和歌山大学

## 19 矢部川水系における感潮域の水質評価について

田中義人、熊谷博史、松尾宏、中村又善、福岡県保健環境研究所年報、80-86、2007.

矢部川水系を対象として感潮域における水質の変動と評価における問題点について考察した。矢部川及び沖端川の感潮域では、潮の昇降によって水質の変動が大きくみられた。特にSSの変動に伴ってCODやT-N、T-P等の水質は影響を受けることが明らかになった。このため、感潮域のサンプリングには潮の干満を考慮し、周辺の状況や底泥の巻き上げなどを勘案することが重要であり、また、水質評価においても、その地点の特徴を十分勘案する必要があると考えられる。

## 20 不適正埋立された廃棄物に由来する有害化学物質の周辺環境中における長期的変遷

土田大輔、高橋浩司、濱村研吾、鳥羽峰樹<sup>\*1</sup>、黒川陽一<sup>\*1</sup>、永瀬誠、宇都宮彬<sup>\*2</sup>：廃棄物学会論文誌、Vol. 18、No. 6、pp. 434-442、2007.

産業廃棄物の不適正埋立が行われた施設の跡地において、廃棄物中の有害化学物質による土壌や地下水などへの影響を調査した。埋立廃棄物を調査した結果、内部に油状廃棄物が残留した金属缶が発見された。油状廃棄物中には、テトラクロロエチレン (PCE)、トリクロロエチレン (TCE) などが含まれていた。施設跡地の土壌からは、揮発性有機化合物 (VOC) が検出され、油状廃棄物の含有成分と一致したことから、漏洩による汚染と判断された。また、埋立行為発生後から、周辺地下水などを調査した結果、PCE、TCE、及びこれらの分解生成物である cis-1, 2-ジクロロエチレンなどが検出された。VOCによる汚染をこれら3成分のモル濃度比及びモル濃度和で評価した。モル濃度比は調査期間中ほぼ一定であり、PCE及びTCEの分解度は約70%と推定された。

\*1 福岡県リサイクル総合研究センター

\*2 日本環境衛生センター

## 21 安定型最終処分場の分類による削減された最終処分費用と潜在的な環境修復費用の推定

土田大輔、中山裕文\*、島岡隆行\*：廃棄物学会論文誌、Vol. 19、No. 2、pp. 120-130、2008.

安定型処分場が分類されたことによる、削減された最終処分費用と潜在的な環境修復費用を推定した。削減された産業廃棄物の最終処分費用は、安定5品目の埋立量及び安定型処分場と管理型処分場の処分単価から求めた。潜在的な環境修復費用は、安定型処分場における不適正処分の修復費用とし、過去の不適正処分事例から推定した。推定の結果、1977年度から2003年度までに削減された最終処分費用は4兆3,030億円となった。潜在的な環境修復費用は、修復方法が全量撤去の場合は1兆717億円、部分撤去の場合は5,371億円と推定された。したがって、正味の削減された最終処分費用は3兆2,313億円または3兆7,659億円となり、安定型処分場が分類されたことにより削減された最終処分費用は、潜在的な環境修復費用を考慮すると4分の3程度に縮減すると考えられた。

\* 九州大学大学院

## 22 安定型産業廃棄物最終処分場監視における熱赤外リモートセンシング

中山裕文\*<sup>1</sup>、小宮哲平\*<sup>1</sup>、島岡隆行\*<sup>1</sup>、土田大輔、高橋浩司\*<sup>2</sup>、宇都宮彬\*<sup>3</sup>：生活と環境、Vol. 53、No. 3、pp. 44-50、2008.

廃棄物の適正な処理・処分を行うことを目的としたリモートセンシング技術の適用可能性について検討した。適用方法の一つとして安定型最終処分場における有機性廃棄物を検出することを目的として、熱赤外線による地表面温度調査を行った。調査研究手順として、第一に屋外予備実験を行い、熱赤外線画像の撮影条件を検討した。第二に安定型最終処分場において、熱赤外線画像の撮影を行った。第三に、ヘリコプターにより処分場全体を上から撮影する上空調査を行った。これらの結果から、熱赤外線によって、埋立地内部の有機物分解反応による発熱現象を把握でき、処分場監視方法として有効であることが明らかとなった。

\*1 九州大学大学院

\*2 福岡県環境部環境政策課

\*3 日本環境衛生センター

## 23 Two new species of the genus *Laccobius* (Coleoptera, Hydrophilidae) from Japan

Yuuki Kamite \*<sup>1</sup>, Takeshi Ogata, Naoyuki Hikida \*<sup>2</sup> : Elytra, 35(1), 34-41, 2007.

ガムシ科シジミガムシ属の2新種、コマルシジミガムシ *Laccobius* (*Cyclolaccobius*) *masatakai* とミゾシジミガムシ *Laccobius* (*Glyptolaccobius*) *moriyai* を本州から記載した。これらの2種は共に湿った岩盤上を生息地としている。*Cyclolaccobius* 亜属と *Glyptolaccobius* 亜属は共に日本から初めて記録される亜属である。日本産シジミガムシ属の亜属への検索も合わせて示した。

\*1 名古屋市衛生研究所

\*2 水戸市千波町

## 24 New record of *Crenitis neglecta* (Coleoptera, Hydrophilidae) from Kyushu, Japan

Yusuke Minoshima\*<sup>1</sup>, Takeshi Ogata, Hiroyuki Yoshitomi \*<sup>2</sup> : Elytra, 35(2), 557-558, 2007.

これまで、本州中央部の長野県、静岡県、埼玉県からのみ知られていたクロヒゲコマルガムシ *Crenitis neglecta* を九州から初めて記録した。検視標本は福岡県矢部村で採集した個体で、河岸の湿った岩盤上から得られた。

\*1 東京農業大学

\*2 株式会社環境指標生物

(3) 学会等口頭発表一覧

①国際学会

演 題 名	発 表 者	学会名 (場所)、年月日
Inhibition effects of green and yellow vegetables against 8-OH-dG induced by nitrophenanthrene derivatives in C3H/He mice	Nobuyuki Sera, Kiyoshi Fukuhara <sup>*1</sup> , Shigeki Sasaki <sup>*2</sup> , Hideo Utsumi <sup>*2</sup> , Hiroshi Tokiwa <sup>*3</sup> and Keiji Wakabayashi <sup>*4</sup> *1 National Institute of Health Science *2 Nagoya City University *3 Kyushu University *4 National Cancer Center	International Symposium for Polycyclic Aromatic Hydrocarbons, metabolism, human exposure and risk assessment, Trondheim, Norway, 5-10 August 2007.
Brominated Flame retardants (HBCD, TBBPA and SPBDEs) in market basket food samples of northern Kyushu district in Japan	Satsuki Murata, Reiko Nakagawa, Yuki Ashizuka, Tsuguhide Hori, Daisuke Yasutake, Kazuhiro Tobiishi and Kumiko Sasaki <sup>*</sup> * National Institute of Health Sciences	27 <sup>th</sup> International Symposium on Halogenated Persistent Organic Pollutants (Tokyo, Japan), September 2-7, 2007.
Daily intake of polybrominated dioxins and polybrominated diphenyl ethers estimated by market basket study	Yuki Ashizuka, Reiko Nakagawa, Satsuki Murata, Daisuke Yasutake, Tsuguhide Hori, Masakazu Horie <sup>*1</sup> , Chizuru Nishioka <sup>*2</sup> , Tetsuo Takahashi <sup>*3</sup> , Ikuo Tamura <sup>*4</sup> , Toshihiko Teshirogi <sup>5</sup> , and Kumiko Sasaki <sup>*6</sup> *1 Saitama Prefectural Institute of Public Health *2 Kagawa Prefectural Research Institute for Environmental Sciences and Public Health *3 Hokkaido Institute of Public Health *4 Nagoya City Public Health Research Institute *5 Miyagi Prefectural Institute of Public Health and Environment *6 National Institute of Health Sciences	27 <sup>th</sup> International Symposium on Halogenated Persistent Organic Pollutants (Tokyo, Japan), September 2-7, 2007.
Comparison of accelerated solvent extraction and alkaline digestion-hexane shaking extraction for determination of dioxins in animal-origin food sample	Tsuguhide Hori, Daisuke Yasutake, Yuki Ashizuka, Jumboku Kajiwara, Reiko Nakagawa, Takao Iida <sup>*1</sup> , Tomoaki Tsutsumi <sup>*2</sup> , and Kumiko Sasaki <sup>*2</sup> *1 Kitakyushu Life Science Center *2 National Institute of Health Sciences	27 <sup>th</sup> International Symposium on Halogenated Persistent Organic Pollutants (Tokyo, Japan), September 2-7, 2007.
PCBs concentrations in blood of Yusho patients: 2006 Yusho annual inspection in Fukuoka, Japan	Tsuguhide Hori, Suguru Inoue <sup>*1</sup> , Daisuke Yasutake, Takashi Todaka, Hironori Hirakawa, Jumboku Kajiwara, Reiko Nakagawa, Yuki Ashizuka, Takao Iida <sup>*2</sup> , Takesumi Yoshimura and Masutaka Furue <sup>*3</sup> *1 Japan Food Hygiene Association *2 Kitakyushu Life Science Center *3 Kyushu University	27 <sup>th</sup> International Symposium on Halogenated Persistent Organic Pollutants (Tokyo, Japan), September 2-7, 2007.

演 題 名	発 表 者	学会名 (場所)、年月日
Congener specific determination of PCBs in human breast milk collected from Hokkaido, Japan	Suguru Inoue <sup>*1</sup> , Tsuguhide Hori, Takashi Todaka <sup>*2</sup> , Hironori Hirakawa, Jumboku Kajiwara, Shizue Kato <sup>*3</sup> , Seiko Sasaki <sup>*3</sup> , Sonomi Nakajima <sup>*3</sup> , Yasuaki Saijo <sup>*3</sup> , Fumihiko Sata <sup>*3</sup> , Reiko Kishi <sup>*3</sup> *1 Japan Food Hygiene Association *2 Kyushu University *3 Hokkaido University	27 <sup>th</sup> International Symposium on Halogenated Persistent Organic Pollutants (Tokyo, Japan), September 2-7, 2007.
Concentrations of polychlorinated dibenzo-p-dioxins, polychlorinated dibenzofurans, and dioxin-like polychlorinated biphenyls in blood collected from 195 pregnant women in Sapporo City, Japan	Takashi Todaka <sup>*1</sup> , Hironori Hirakawa, Jumboku Kajiwara, Tsuguhide Hori, Kazuhiro Tobiishi, Daishuke Onozuka, Shizue Kato <sup>*2</sup> , Seiko Sasaki <sup>*2</sup> , Sonomi Nakajima <sup>*2</sup> , Yasuaki Saiji <sup>*2</sup> , Fumihiko Sata <sup>*2</sup> , Reiko Kishi <sup>*2</sup> , Takao Iida <sup>*3</sup> , Masutaka Furue <sup>*1</sup> *1 Kyushu University *2 Hokkaido University *3 Kitakyushu Life Science Center	27 <sup>th</sup> International Symposium on Halogenated Persistent Organic Pollutants (Tokyo, Japan), September 2-7, 2007.
Time trend of dioxin like PCBs, PCDFs, PCDDs concentration in blood among Yusho patients	Jumboku Kajiwara, Takashi Todaka <sup>*1</sup> , Hironori Hirakawa, Tsuguhide Hori, Suguru Inoue <sup>*2</sup> , Kazuhiro Tobiishi, Reiko Nakagawa, Daisuke Onozuka, Yoshiko Takao, Takesumi Yoshimura, Masataka Furue <sup>*1</sup> *1 Kyushu University *2 Japan Food Hygiene Association	27 <sup>th</sup> International Symposium on Halogenated Persistent Organic Pollutants (Tokyo, Japan), September 2-7, 2007.
Transition of PCB and PCDF concentration in Yusho patients for 38 years	Yoshito Masuda <sup>*1</sup> , Takesumi Yoshimura, Jumboku Kajiwara, John Jake Ryan <sup>*2</sup> *1 Daiichi College of Pharmaceutical Sciences *2 Health and Welfare Canada,	27 <sup>th</sup> International Symposium on Halogenated Persistent Organic Pollutants (Tokyo, Japan), September 2-7, 2007.
Dioxin concentration in the blood of patients collected during medical check-up for Yusho in 2006	Takashi Todaka <sup>*</sup> , Hironori Hirakawa, Jumboku Kajiwara, Kazuhiro Tobiishi, Daishuke Onozuka, Takao Iida, Takesumi Yoshimura, Masutaka Furue <sup>*1</sup> * Kyushu University	27 <sup>th</sup> International Symposium on Halogenated Persistent Organic Pollutants (Tokyo, Japan), September 2-7, 2007.
Air Purification Technique on an ACF-mounted Vehicle with its Running Wind	Takaaki Shimohara, Auko Kitajou, Shunji Niiya, Naruyasu Itagaki <sup>*1</sup> , Toshihiro Kitada <sup>*2</sup> *1 Fukuoka Research Center for Recycling Systems *2 Toyohashi University of Technology	The 13 <sup>th</sup> Joint Seminar of JSPS-MOE Core University Program on Urban Environment, Invitation lecture, Beijing, CHINA, September 3-4, 2007.

演 題 名	発 表 者	学会名 (場所)、年月日
A wide-area scavenging technology of air pollutants using activated carbon fiber and its prospect for the future	Takaaki Shimohara, Auko Kitajou, Shunji Niiya, Naruyasu Itagaki <sup>*1</sup> , Toshihiro Kitada <sup>*2</sup> , Isao Mochida <sup>*3</sup> *1 Fukuoka Research Center for Recycling Systems *2 Toyohashi University of Technology *3 Kyushu University	Carbon Saves the Earth 2007 (5th Japan-China-Korea Joint Symposium), Invitation lecture, Beppu city, Japan, November 4-8, 2005.
計 (国際会議)	1 2 件	

②国内学会（全国）

演 題 名	発 表 者	学会名（場所）、年月日
北部九州圏における新型インフルエンザ・シミュレーションと介入効果	小野塚大介、大日康史、菅原民枝、岡部信彦	第66回日本公衆衛生学会 （松山市）、 平成19年10月24-26日
福岡県における結核統計の地域分析	小野塚大介、世良暢之、田中義人、今井俊介、吉村健清	第21回公衆衛生情報研究協議会 （和光市）、 平成20年1月31-2月1日
高活性炭素繊維を用いた環境大気浄化に関する研究(15)－道路直近のNO/NO <sub>2</sub> 濃度変動と高濃度NO <sub>2</sub> の出現について	新谷俊二、喜多條鮎子、下原孝章	第48回大気環境学会年会 （岡山市）、 平成19年9月5-7日
土壌中ダイオキシン類の簡易抽出法の検討	伊津野知佳*、安武大輔、大野健治、飛石和大、岩本眞二、桜木建治、松枝隆彦 * 久留米工業大学	第16回環境化学討論会 （北九州市）、 平成19年6月20日-22日
LC/MSによる化学物質分析法の基礎的研究(33)	花田喜文*、梶原葉子*、一田亜希子 <sup>*1</sup> 、飛石和大、塚谷裕子 * 北九州市環境科学研究所	第16回環境化学討論会 （北九州市）、 平成19年6月20日-22日
福岡県で分離された稀なO群血清型の腸管出血性大腸菌について	中村祥子、江藤良樹、濱崎光宏、村上光一、竹中重幸、堀川和美	第12回腸管出血性大腸菌感染症シンポジウム（東京都）、 平成20年3月7日-8日
マーケットバスケット方式による臭素化ダイオキシン及び臭素化ジフェニルエーテルの摂取量調査	芦塚由紀、中川礼子、村田さつき、堀 就英、安武大輔、堀江正一 <sup>*1</sup> 、西岡千鶴 <sup>*2</sup> 、高橋哲夫 <sup>*3</sup> 、田村征夫 <sup>*4</sup> 、手代木年彦 <sup>*5</sup> 、佐々木久美子 <sup>*6</sup> *1 埼玉県衛生研究所 *2 香川県環境保健研究センター *3 北海道立衛生研究所 *4 名古屋市衛生研究所 *5 宮城県塩釜保健所黒川支所 *6 元国立医薬品食品衛生研究所	第16回日本環境化学討論会 （北九州市）、 平成19年6月20日-22日
腸管出血性大腸菌O157のIS-printingとパルスフィールドゲル電気泳動の比較	江藤良樹、中村祥子、濱崎光宏、村上光一、竹中重幸、堀川和美、大岡唯祐 <sup>*1</sup> 、林哲也 <sup>*1</sup> 、楠本正博 <sup>*2</sup> 、寺嶋 淳 <sup>*3</sup> *1 宮崎大学 *2 東洋紡績 *3 国立感染症研究所	第12回腸管出血性大腸菌感染症シンポジウム （東京都）、 平成20年3月7日-8日

演 題 名	発 表 者	学会名 (場所)、年月日
食品の有機臭素系化合物分析 と その汚染濃度	村田さつき、芦塚由紀、中川礼子、堀 就英、 佐々木久美子* <sup>1</sup> *1 元国立医薬品食品衛生研究所	第16回日本環境化学討論会 (北九州市)、 平成19年6月20-22日
油症患者の血中ダイオキシン 類濃度の追跡調査 (2005年度)	梶原淳睦、戸高尊* <sup>1</sup> 、平川博仙、堀就英、 井上英* <sup>2</sup> 、松枝隆彦、飛石和大、安武大輔、 小野塚大介、高尾佳子、中川礼子、吉村健清 *1 九州大学 *2 日本食品衛生協会	第16回日本環境化学討論会 (北九州市)、 平成19年6月20-22日
ヒト母乳中ポリ塩化ビフェニ ール (PCB) 及びダイオキシン 類濃度の分析	梶原淳睦、戸高尊* <sup>1</sup> 、平川博仙、堀就英、 加藤静恵* <sup>2</sup> 、佐々木成子* <sup>2</sup> 、中島そのみ* <sup>2</sup> 、 西條泰明* <sup>2</sup> 、佐田文宏* <sup>2</sup> 、岸玲子* <sup>2</sup> 、 飯田隆雄* <sup>3</sup> 、古江増隆* <sup>1</sup> *1 九州大学 *2 北海道大学 *3 (財)北九州生活科学センター	日本食品衛生学会第94回学術講 演会(静岡市)、 平成19年10月23-24日
Concentrations of polychlorinated dibenzo-p-dioxins, polychlorinated dibenzofurans, and dioxin-like polychlorinated biphenyls in blood and breast milk collected from 60 mothers in Sapporo City, Japan	戸高尊* <sup>1</sup> 、平川博仙、梶原淳睦、堀就英、飛石和大、 小野塚大介、加藤静江* <sup>2</sup> 、佐々木成子* <sup>2</sup> 、 中島そのみ* <sup>2</sup> 、西條泰明* <sup>2</sup> 、佐田文宏* <sup>2</sup> 、岸玲子* <sup>2</sup> 、 飯田隆雄* <sup>3</sup> 、古江増隆* <sup>1</sup> *1 九州大学 *2 北海道大学 *3 (財)北九州生活化学センター	環境ホルモン学会第10回研究発 表会(さいたま市)、 平成19年12月10-11日
保存さい帯(へその緒)中のダ イオキシン類の分析	梶原淳睦、戸高尊* <sup>1</sup> 、平川博仙、堀就英、 長山淳哉* <sup>1</sup> 、吉村建清、古江増隆* <sup>1</sup> *1 九州大学	環境ホルモン学会第10回研究発 表会(さいたま市)、 平成19年12月10-11日
高活性炭素繊維を用いた環境 大気浄化に関する研究 (16) -NO浄化率の向上と通風性の高 いユニット形状について-	下原孝章、新谷俊二、喜多條鮎子、吉川正晃* <sup>1</sup> 、 北田敏廣* <sup>2</sup> *1 (株)大阪ガス *2 豊橋技術科学大学	第48回大気環境学会年会 (岡山市)、 平成19年9月5日-7日
自動車内の大気汚染流入の実 態と高活性炭素繊維を用いた 車内浄化技術の検討	喜多條鮎子、新谷俊二、下原孝章	第48回大気環境学会年会 (岡山市)、 平成19年9月5日-7日

演 題 名	発 表 者	学会名（場所）、年月日
高活性炭素繊維を用いた環境 大気浄化に関する研究（17） －高活性炭素繊維搭載型自動 車による広域的な沿道NOx浄 化技術の開発－	喜多條鮎子、板垣成泰、新谷俊二、下原孝章	第48回大気環境学会年会 （岡山市）、 平成19年9月5日-7日
福岡県における煙霧と硫酸塩 濃度の関係について	山本重一、田上四郎、大石興弘、岩本真二	第48回大気環境学会年会 （岡山市）、 平成19年9月5日-7日
福岡・鹿家地区における水中 ラドンによる屋内ラドン濃度 への寄与並びに線量評価	檜崎幸範、石橋融子、松尾宏、石川徹夫* <sup>1</sup> 、 吉永信治* <sup>1</sup> 、卓維海* <sup>1</sup> 、床次真司* <sup>1</sup> 、古川雅英* <sup>2</sup> *1 放射線医学総合研究所 *2 琉球大学	第49回環境放射能調査研究成果 発表会（東京都）、 平成19年12月4日
飲用水中におけるラドンの除 去手法並びに定量的解析	檜崎幸範、安岡由美* <sup>1</sup> 、志野木正樹* <sup>1</sup> 、石川徹夫* <sup>2</sup> 、 床次真司* <sup>2</sup> *1 神戸薬科大学 *2 放射線医学総合研究所	第49回環境放射能調査研究成果 発表会（東京都）、 平成19年12月4日
福岡県における放射能調査	檜崎幸範、田上四郎、岩本真二	第49回環境放射能調査研究成果 発表会（東京都）、 平成19年12月4日
大気中 <sup>7</sup> Beをトレーサーとし た成層圏オゾンの流入評価	檜崎幸範、田上四郎、山本重一、藤川和浩、 力 寿雄、大久保彰人、大石興弘、岩本真二、 小林ちあき* <sup>1</sup> *1 気象庁オゾン層研究センター	第9回環境放射能研究会（つくば 市）、平成20年3月27日-28日
空气中化学物質の個人暴露の 実態	力 寿雄、岩本真二、吉村健清、瀧川智子* <sup>1</sup> 、 竹内靖人* <sup>2</sup> 、岸 玲子* <sup>3</sup> *1 岡山大学 *2 中央労働災害防止協会 *3 北海道大学	第78回日本衛生学会総会（熊本 市）、平成20年3月28日-31日
博多湾における生物生息適正 地の評価	熊谷博史	第31回瀬戸内海水環境研会議（北 九州市）、平成20年2月8日
陸域からの溶存態ケイ酸の流 出機構と海域生態系に与える 影響の解明	熊谷博史、田中義人、松尾宏、白川ゆかり	第23回全国環境研究所交流シン ポジウム（つくば市）、 平成20年2月13-14日

演 題 名	発 表 者	学会名（場所）、年月日
陸域からの溶存態ケイ酸の流出機構と海域生態系に与える影響の解明	熊谷博史、田中義人、松尾宏、白川ゆかり	第42回水環境学会年会（名古屋市）、 平成20年3月19-21日
河川に生息するコウチュウ目の微生物環境	緒方健、中島淳*1、上手雄貴*2 *1 九州大学大学院農学研究院 *2 名古屋市衛生研究所	日本陸水学会第72回大会（水戸市）、 平成19年9月11-13日
福岡県筑後地域に侵入したブラジルチドメグサの分布と生育状況	須田隆一、山崎正敏	日本生態学会第55回大会（福岡市）、 平成20年3月15-17日
計（国内学会（全国））	27件	

③国内学会（地方）

演 題 名	発 表 者	学会名（場所）、年月日
広域連携システム九州ブロック情報センターの立ち上げと運用について	高尾佳子、新谷俊二、片岡恭一郎、飛野敏明* <sup>1</sup> 、中島龍一* <sup>1</sup> 、古庄真喜* <sup>2</sup> *1 熊本県保健環境科学研究所 *2 現熊本県環境生活部環境保全課	第33回九州衛生環境技術協議会（鹿児島市）、平成19年10月11日
福岡県に生息する野生動物のE型肝炎ウイルス保有状況調査	石橋哲也、中山志幸、江藤良樹、世良暢之、千々和勝己	第33回九州衛生環境技術協議会（鹿児島市）、平成19年10月11日
最近の油症検診結果について —血中ダイオキシン類濃度推移を中心に—	梶原淳睦、平川博仙、堀就英、芦塚由紀、村田さつき、新谷依子、中川礼子	第33回九州衛生環境技術協議会（鹿児島市）、平成19年10月11日
クラミジア抗体検査の精度管理と判定保留の不確実性	竹中重幸、中村祥子、江藤良樹、濱崎光宏、村上光一、堀川和美	第33回九州衛生環境技術協議会（鹿児島市）、平成19年10月11日
福岡県における煙霧と硫酸イオン濃度の関係—2006年9月～2007年8月のデータより—	山本重一、藤川和浩、力寿雄、檜崎幸範、大石興弘、田上四郎、岩本真二	大気環境学会九州支部総会（福岡市）、平成20年1月25日
事業場排水中に含まれる溶存態ケイ素の実態調査	熊谷博史、田中義人、松尾宏、白川ゆかり	平成19年度日本水環境学会九州支部研究発表会（熊本市）、平成20年3月1日
都市河川における全亜鉛濃度とその存在形態との関係	松尾宏、熊谷博史、田中義人、檜崎幸範、白川ゆかり	平成19年度日本水環境学会九州支部研究発表会（熊本市）、平成20年3月1日
生物多様性保全に向けた遺伝学的研究	中村朋史、須田隆一、緒方健、星良和* * 九州東海大学	第33回九州衛生環境技術協議会（鹿児島市）、平成19年10月11-12日
計（国内学会（地方））		8件

(4) 報告書一覧

委託事業名	報告書名	執筆者	発行年月
平成19年度厚生労働科学研究費補助金（地域健康危機管理研究事業）	（分担研究報告書） 行政還元情報を利用した症候群サーベイランスの検討	小野塚大介、大日康史、 谷口清州、岡部信彦、吉村健清	平成20年3月
平成19年度厚生労働科学研究費補助金（地域健康危機管理研究事業）	（分担研究報告書） 地方衛生研究所の疫学機能強化に関する研究	前田秀雄、岸本剛、加藤政彦、 森田幸雄、鈴木智之、堀元栄詞、 小野塚大介、神谷信行、阿保満	平成20年3月
平成19年度厚生労働科学研究費（地域健康危機管理研究事業）	（分担研究報告書） 欧米諸国の地方衛生研究所相当機関における危機管理対策の一環としての精度管理制度の調査と本邦への導入に関する検討	吉村健清、小野塚大介、 田中義人、世良暢之	平成20年3月
平成19年度厚生労働科学研究費補助金（健康危機管理・テロリズム対策システム研究事業）	（分担研究報告書） 北部九州圏パーソントリップ調査データを用いた Real individual based model のパンデミック対策への応用	小野塚大介、大日康史、 菅原民枝	平成20年3月
平成19年度厚生労働科学研究費補助金（食品の安心・安全確保推進研究事業）	（熱媒体の人体影響とその治療法に関する研究 平成19年度総括・分担研究報告書） 油症認定患者追跡調査	吉村健清、小野塚大介、 片岡恭一郎、高尾佳子	平成20年3月
平成19年度厚生労働科学研究費補助金（食品の安心・安全確保推進研究事業）	（熱媒体の人体影響とその治療法に関する研究 平成19年度総括・分担研究報告書） 油症の健康影響に関する疫学的研究	吉村健清、片岡恭一郎、 高尾佳子、小野塚大介、 梶原淳睦	平成20年3月
平成19年度化学物質環境実態調査	平成19年度化学物質環境実態調査分析法(LC/MS)開発調査結果報告書	塚谷裕子、桜木建治、松枝隆彦、 大野健治、安武大輔、池浦太荘、 馬場義輝、飛石和大、堀家克巳*、 葉山良博* * 環境保全課	平成20年3月
平成19年度化学物質環境実態調査	平成19年度化学物質環境実態調査初期環境調査（水質）結果報告書	塚谷裕子、桜木建治、松枝隆彦、 大野健治、安武大輔、池浦太荘、 馬場義輝、飛石和大、堀家克巳*、 葉山良博* * 環境保全課	平成20年3月

委託事業名	報告書名	執筆者	発行年月
平成19年度化学物質環境実態調査	平成19年度化学物質環境実態調査 初期環境調査（大気）結果報告書	塚谷裕子、桜木建治、松枝隆彦、 大野健治、安武大輔、堀家克巳*、 葉山良博* * 環境保全課	平成20年3月
平成19年度化学物質環境実態調査	平成19年度化学物質環境実態調査 詳細環境調査（水質）結果報告書	塚谷裕子、桜木建治、松枝隆彦、 大野健治、安武大輔、池浦太荘、 馬場義輝、飛石和大、堀家克巳*、 葉山良博* * 環境保全課	平成20年3月
平成19年度化学物質環境実態調査	平成19年度化学物質環境実態調査 モニタリング調査（大気）結果報告書	塚谷裕子、桜木建治、松枝隆彦、 大野健治、安武大輔、堀家克巳*、 葉山良博* * 環境保全課	平成20年3月
平成19年度厚生労働科学研究 地域における健康危機管理に 対応するための地方衛生研究 所機能強化に関する研究	分担研究報告書) Real-time PCR を用いた食中毒細菌 の網羅的検査法の標準化	江藤良樹、中村祥子、村上光一、 堀川和美、吉村健清	平成20年3月
厚生労働科学研究費補助金 地域健康危機管理研究事業平 成19年度総括・分担研究報告 書	地域における健康危機に対応するた めの地方衛生研究所機能強化に関す る研究	吉村健清、中川礼子、芦塚由紀、 山本重一、江藤良樹、中村祥子、 村上光一、堀川和美、 千々和勝己、世良暢之、 石橋哲也、中山志幸、 小野塚大介	平成20年3月
平成19年度厚生労働科学研究 費補助金（エイズ対策研究事 業）	HIV 検査相談機会の拡大と質的充 実に関する研究	千々和勝己、世良暢之、 石橋哲也、中山志幸、鷺山和幸* * さぎやま泌尿器科クリニック	平成20年3月
平成17-19年度厚生労働科学 研究費補助金（健康科学総合 研究事業）	（分担研究報告書） 欧米諸国の地方衛生研究所相当期間 における危機管理対策の一環として の精度管理制度の調査と本邦への導 入に関する検討（欧米諸国調査）	吉村健清、今井俊介、田中義人、 小野塚大介、世良暢之	平成20年3月

委託事業名	報告書名	執筆者	発行年月
平成18年度厚生労働科学研究費補助金（食品の安心・安全確保推進研究事業）	（分担研究報告書）食品中臭素化ダイオキシン及びその関連化合物汚染調査	中川礼子、芦塚由紀、村田さつき、堀 就英、安武大輔、高橋哲夫* <sup>1</sup> 、田村征男* <sup>2</sup> 、手代木年彦* <sup>3</sup> 、佐々木久美子* <sup>4</sup> *1 北海道立衛生研究所 *2 名古屋市衛生研究所 *3 宮城県塩釜保健所黒川支所 *4 国立医薬品食品衛生研究所	平成19年7月
平成18年度厚生労働科学研究費補助金（食品の安心・安全確保推進研究事業）	（分担研究報告書）食品中ダイオキシン類分析の迅速化・信頼性向上に関する研究 食品中ダイオキシン類分析における高速溶媒抽出法の応用に関する研究—トータルダイエット試料の迅速抽出への応用並びに個別食品分析における運用試験—	堤 智昭*、堀 就英、安武大輔、中川礼子 * 国立医薬品食品衛生研究所	平成19年7月
厚生労働科学研究費補助金（食品の安心・安全確保推進研究事業）	（平成16～18年度 総合研究報告書）ダイオキシン類による食品汚染実態の把握に関する研究	佐々木久美子*、米谷民雄*、天倉吉章*、堤 智昭*、中川礼子 * 国立医薬品食品衛生研究所	平成19年7月
平成19年度厚生労働科学研究費補助金（食品の安心・安全確保推進研究事業）	（熱媒体の人体影響とその治療法に関する研究 平成19年度総括・分担研究報告書）油症患者血液中のPCDF類実態調査	吉村健清、梶原淳睦、中川礼子、片岡恭一郎、松枝隆彦、平川博仙、堀 就英、飛石和大、芦塚由紀、安武大輔、小野塚大介、村田さつき、高尾佳子、新谷依子、戸高 尊* <sup>1</sup> 、飯田隆雄* <sup>2</sup> *1 九州大学 *2 北九州生活科学センター	平成20年3月
平成19年度厚生労働科学研究費補助金（食品の安心・安全確保推進研究事業）	（熱媒体の人体影響とその治療法に関する研究 平成19年度総括・分担研究報告書）油症検診以外の油症認定患者の生体試料中のダイオキシン類実態調査	吉村健清、長山淳哉、梶原淳睦、平川博仙、堀 就英、飛石和大、安武大輔、小野塚大介、戸高 尊* <sup>1</sup> 、飯田隆雄* <sup>2</sup> *1 九州大学 *2 北九州生活科学センター	平成20年3月

委託事業名	報告書名	執筆者	発行年月
平成19年度厚生労働科学研究費補助金（食品の安全性高度化推進研究事業）	（熱媒体の人体影響とその治療法に関する研究 平成18年度総括・分担研究報告書） 油症認定患者血液中PCB等追跡調査における分析法の改良およびその評価に関する研究	吉村健清、梶原淳睦、飯田隆雄* <sup>1</sup> *1 北九州生活科学センター	平成20年3月
平成19年度厚生労働科学研究費補助金（化学物質リスク研究事業）	（前向きコホート研究による先天異常モニタリング、特に尿道下裂、停留精巣のリスク要因と内分泌かく乱物質に対する感受性の解明 平成19年度総括・分担研究報告書）妊婦の血液及び母乳中のダイオキシン類、PCB濃度	梶原淳睦、吉村健清、中村又善、中川礼子、平川博仙、堀 就英、芦塚由紀、村田さつき、新谷依子、小野塚大介、松枝隆彦、飛石和大、安武大輔、戸高 尊* <sup>1</sup> 、飯田隆雄* <sup>2</sup> *1 九州大学 *2 北九州生活科学センター	平成20年3月
平成19年度厚生労働科学研究費補助金（地域健康危機管理研究事業）	シックハウス症候群の実体解明及び具体的対応方策に関する研究（分担研究報告書）	力 寿雄、岩本真二、吉村健清	平成20年3月
平成19年度独立行政法人、環境再生保全機構委託研究	局地汚染地域における窒素酸化物および浮遊粒子状物質の複合的削減のための対策技術に関する調査研究	下原孝章	平成20年2月
平成19年度独立行政法人、環境再生保全機構委託研究	高活性炭素繊維を用いた沿道排ガス削減技術に関する調査報告書	下原孝章	平成20年2月
平成19年度環境省有害大気汚染物質発生源対策調査委託業務	平成19年度有害大気汚染物質発生源対策調査委託業務報告書	力 寿雄、田上四郎、大石興弘、山本重一、藤川和浩、岩本真二	平成20年3月
平成18年度文部科学省環境放射能水準調査	平成18年度環境放射能水準調査報告書	有田明人、田上四郎、岩本真二	平成19年4月
平成18年度環境省国設筑後小郡酸性雨測定所における酸性雨実態把握調査	平成18年度国設筑後小郡酸性雨測定所における酸性雨実態把握調査	檜崎幸範、大石興弘	平成19年7月
平成19年度福岡県リサイクル総合研究センター研究会	「焼却残渣の脱塩促進と資源化のための研究会」実施報告書	島岡隆行*（代表研究者）濱村研吾、永瀬誠、志水信弘、土田大輔、梶原佑介 * 九州大学	平成20年3月

委託事業名	報告書名	執筆者	発行年月
(財)河川環境管理財団河川整備基金助成事業	平成18年度河川環境管理財団助成金報告書「維持流量の弾力的運用による河川環境の保全・改善効果―底生動物調査」	緒方健、山崎正敏、中村朋史	平成19年6月
計（報告書）	30件		